

タミル文学への手引き*

高橋孝信

1. はじめに

自分の専門と関連して、あるいはそれを離れた他分野のことで、参照したり情報を得たいことは誰しも経験することである。そこで本稿では、わが国のインド学では研究の歴史も浅く研究者数も少ないタミル文学について、サンスクリット文学、インド哲学、仏教など、他分野の専門家が参照したいとき、どのような文献がよいかを入手の利便性も考慮しつつ述べ参考にと供したい。

2. タミル文字のローマ字転写法と読み方

タミルの語彙、人名、書名などはさまざまに表記される。たとえば、タミル古典文学は古代パーンディヤ朝の首府マドゥライに存在したとされる宮廷文芸院サンガムにちなみサンガム文学と通称されるが、パーンディヤは Pandya、Pāṇṭiya、Pāndya、サンガムは Sangam、Caṅkam、Śaṅgam などと表記される。そこでまず、タミル文字のローマ字への転写法について述べておく。

タミル文字のローマ字転写法を大別すれば以下の4通りになるが、それぞれ一長一短がある。

[A] タミル文字で表される音を補助記号を用いないでローマ字で表わす方法（例 Pandya）：この転写法はインド人の多くが用いるほか、分野（たとえば歴史学）によっても多用されるが、馴染みのない単語であると正確な読みも原綴りも分からず、その内容を辞書などで確かめられないことがある。

[B] 個々のタミル文字のローマ字転写法を定め、その規則にしたがって転写する方法：この転写法はさらに二つに分けられる。

[B1] 後述する *Tamil Lexicon*¹方式：この方式では原綴りは分かっても読みが分からない（例 Caṅkam）。欧米の文学研究者の大部分はこの方式にしたがうが、すべてこの方式にしたがうわけではなく、よく表れる王朝名「 Cholera 」なら *Tamil Lexicon* 方式で Cōḷa とはせず、英語式に Chola とする。

*本稿は、『江島恵教博士追悼論集 空と実在』（春秋社、2000年、523-538頁）所収のものとはほぼ同じであるが、文末注を脚注に変えるなど、部分的に手を加えてある。また、フォントの大きさも変えてあり、ページ番号はまったく異なるので注意してほしい。

¹*Tamil Lexicon*, 6 vols.+Supplement, University of Madras, Madras, 1926-1938 (reprint, 1982), cvi+3929+ 423+xvi p. 編者は後出の S. Vaiyapuri Pillai。この大辞典出版がいかに大事業であったか、またタミル近代の政治にいかなる意味を持ったかなどについては、Arooran, K. Nambi, *Tamil Renaissance and Dravidian Nationalism 1905-1944*, Koodal Publishers, Madurai, 1980, pp. 110-122 を参照のこと。

[B2] *Tamil Lexicon* 方式に実際の音を加味した方法：この方法では、たとえば [B1] で Caṅkam とされるものは Saṅgam または Śaṅgam とされるから、音も原綴りも分かり一番よい方法であるようにも思える。しかし、この方法でも原綴りと音との関係を知っている必要があるし、さらに問題なのはタミル語の読みが決して一様ではないということである。たとえば有名なジャイナ教叙事詩 *Cīvakacintāmaṇi* ([B1] 方式による) は *Sīvahasindāmaṇi* とか *Cīvagacindāmaṇi*、また *Jīvakacintāmaṇi* という読みもある²。

[C] 上述の [A] と [B] の2つを混合して表記する方法 (例 Pāṇḍya)

以上のような次第であるが、*Tamil Lexicon* 方式 [B1] はもっとも汎用性があるし、また *Tamil Lexicon* は見出し語にタミル文字だけでなくローマ字も使っていて、その転写法と読み方を知っていれば同辞典も使えて有益と思えるので、以下に [B1] 方式での読み方について略述する。

インドの多くの言語 (ことにサンスクリット語) とは異なり、タミル語には有声音 (g, j, d など) や氣息音 (kh, gh など) を表す文字がなく、硬子音は同一文字を用いていても位置によって音が異なる。それを示したのが下の表で、表の左端の硬子音と、() に入れた同系鼻音の表記法が *Tamil Lexicon* 方式によるものである。

硬子音 \ 位置	語頭	母音間	同系鼻音の後	重なるとき
k	k	g または h	(ṅ)g	kk
c	s または ś	s または j	()j	cc
ṭ	(なし)	ḍ	(ṅ)ḍ	ṭṭ
t	t	d	(n)d	tt
p	p	b	(m)b	pp
ṙ	(なし)	r	(ṅ)dr	tr

この方式にしたがえば、上述した Caṅkam が Saṅgam または Śaṅgam となることが分かるであろう。また、サンスクリットやプラークリット起源である語にはこの原則は必ずしも適用されないことは、上述の *Cīvakacintāmaṇi* の例が示すとおりである。

この他、タミル文字の転写に関して注意すべきこととしては、母音の e, o には長短の区別があるということである (これはドラヴィダ諸語に共通である)。したがって、veda は *Tamil Lexicon* 方式では vēta となる。また子音では、ドラヴィダ諸語に特有の ḷ, ḻ (*Tamil Lexicon* 方式) や、サンスクリット語を書写するための文字 j, ś、

²タミル語の読みについては稿を改めて論じる必要があるが、この例に即して少しだけ触れておく。*Cīvakacintāmaṇi* はジャイナ教徒 Tiruttakkatēvar (9~12世紀頃) の作品で、ジャイナ教徒に人気のあるジーヴァカ (9世紀の Guṇabhadra の *Uttarapurāna* では Jīvandhara) の物語で、表題は「ジーヴァカの如意珠」の意味である。作品は13章3145の4行詩からなり、彼の誕生と成長、8人の女と順次結婚する経緯 (3~9および12章)、王国の獲得、そして最後に王国を捨て苦行に入る次第を描く。宮廷を中心にかなり愛好され、また後の叙事詩文学に多大な影響を与えた。

したがって、ジャイナ教徒 (サンスクリット語にも通じていることが多い) やバラモンであれば、元のサンスクリット語を想起して *Jīvakacintāmaṇi* と読むのが普通である。他方、それ以外のタミル知識人たちはタミル語化した読み方で読んでいる。それらを反映したのが *Sīvahasindāmaṇi* とか (例 Jesudasan, C. and H., *A History of Tamil Literature*, pp. 145–150)、*Cīvagacindāmaṇi* という読みである (Renou, L. et Filliozat, J., *L'Inde Classique*, §2412)。

ṣ, s, h, kṣ があるが、これらのなかで ṛ は [A] や [C] 方式では zh と転写されることがある³。

3. 書誌学書および文学辞典

主要ドラヴィダ語であるカンナダ、テルグ、マラヤーラム語の文学と較べると、タミル文学に関する通史、個別研究は質・量ともにはるかに抜きん出ている。それらタミル文学研究の中でも、まず挙げるべきはタミル学およびドラヴィダ学の第一人者 Kamil V. ^{スヴェレビル}Zvelebil のものであろう⁴。Zvelebil の研究の特色は、恵まれた語学的才能に加え、卓越した情報収集力、および優れた分析力に裏付けられたバランスのとれた正確な記述、さらに関連研究などの豊富な情報にある。まず、書誌学書を3点取り上げよう。

- (1) *Tamil Literature (Handbuch der Orientalistik, Zweite Abteilung, 2. Band, 1. Abschnitt)*, E. J. Brill, Leiden, 1975, xii+307 p.

後出の(3)が出るまで(あるいは「(3)が出てもおなじ」と言うべきかもしれない)、タミル文献に関するもっとも優れた書誌学書である。ただし、この書で扱われるのは古代から18世紀半ば(すなわち近代以前)に到るまでの作品である。上に述べた氏の特色はこの書にも遺憾なく発揮され、個々の作品の解題・年代論・参考文献など、必要な情報のほとんどが含まれている。記述は文学史の流れにしたがっているから、探すべき作品・人名・項目などは巻末の充実した索引によるとよい。なお、この索引にはほとんど誤植がない。その他、付録には古典期を代表する16詩人のデータ、ならびにタミル韻律の解説を含む。大部ではないので携帯性に優れている。入手は容易である。転写法は[B1]による。

- (2) *Tamil Literature (A History of Indian Literature ed. by J. Gonda, Vol. 10, Fasc. 1)*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1974, viii+316 p.

(1)と書名が同じであり、刊行時期もほぼ同じであるから注意を要する(ただし出版社は異なる)。内容は(1)と似ているが、記述は文学史に沿ったものではなく、「詩文学」(第1章)、「バクティ文学」(第2章)、「金言作品」(第3章)、「叙事詩およびプレーナ」(第4章)、「プラバンダ」(第5章)、「散文文学」(第6章)のように文学ジャンル別となっている。総合的に見ると、書誌学書とし

³タミル語以外のドラヴィダ主要言語であるカンナダ、テルグ、マラヤーラム語は、サンスクリット語の字母表に相当する音を表す文字と、ドラヴィダ諸語に特有の ṛ, ṛ̣, ṛ̥ という文字で表される。そこで、後者を除いてはサンスクリット語の読み方にしたがえばよい。ただし、サンスクリット語と異なり、e, o は短母音で、各々の長母音はē, ō で表す。

⁴Zvelebil は1927年チェコ・プラハ生。カレル大学でインド学を学び、同大助教授、シカゴ大学客員教授、同大ドラヴィダ学正教授をへて、ライデン大学専任研究員、ユトレヒト大学専任研究員、ユトレヒト大学助教授、同教授、'91年同名誉教授となる。この間、パリ、ハイデルベルク大学客員教授を始め、モスクワ、レニングラード、ストックホルム、ウプサラ、マドラス、エルサレム、フィラデルフィア各大学で講師なども勤め、それら各地での学生も多い。

ては(1)の方が優れているが、本書の第5章は、今日でもなおプラバンダ⁵に関するもっとも優れた概説であるし、第6章は、(1)が扱っていない近現代の作家および作品の概説で、これも近現代の作品に関してはもっとも優れたものである。入手は容易である。転写法は [B1] による。

- (3) Zvelebil, K.V., *Lexicon of Tamil Literature (Handbuch der Orientalistik, 2 Abteilung, Indien, Band 9)*, E.J.Brill, Leiden/New York/K In, 1995, xxviii+784 p.

著者のタミル研究の集大成とも言える書で、自らも代表作 (*mugnum opus*) と認めるタミル文学に関する事典である。(1) や (2) と異なり、作品名・人名・事項を見出し語として立て、それらを英語のアルファベット順に配列している。つまり、[B1] の転写法にしたがうものの、長母音や反舌音などを表わす補助記号のついた文字は、それら補助記号のない文字と等価として配列されているから、例えば、近代タミルの国民的詩人とされるパーラティは ([タミル] *Cuppiramaṇiya Pārati*, [英] *Subrahmanya/Subramania Bharati*)⁶、英語のアルファベットの *Cuppiramaniya Parati* の位置に来ている。またこの詩人の例で言うと、普通 *Bharati* と英語表記が用いられるが、それで引くこともできるようになっている。

内容としては、(1) や (2) で取り上げられた項目がほぼ網羅されているばかりでなく、16世紀から近代にかけて南インドで活躍した西洋人宣教師や研究者およびその作品、近現代のタミル人学者および作家などに関する項目が大幅に増補されている。さらに、すべての項目にわたって、(1) の出版以後に出た主要な論文・研究書も参考文献に挙げられている。他方、本書は事典ゆえの弱点も併せ持っている。それは、たとえば、タミル・バクティについて知りたいとき、(1) であればその時代・社会背景、文学史の中での位置、シヴァ派およびヴィシュヌ派の両派の宗教詩人たちとその作品群などが記述されるのに対し

⁵ プラバンダ (*Sanskrit* で *prabandha*、*Tamil* で *pirapantam*) とは、6世紀頃から徐々に発達し始め、中世に創作のピークを迎え、その後も今日に到るまで創作される様々なジャンルの文学作品の総称で、伝統的に 96 種が数え上げられる。

プラバンダという呼称はテルグ文学でも使われるが、その場合、プラナーナから題材を得て、マハーカーヴィヤに倣って文学的に完成させた作品を言う。テルグ・プラバンダ作品は、テルグ文学の黄金期、すなわち、ヴィジャヤナガル王朝 (14 ~ 7 世紀) の最盛期を築いた王にして文人である *Kṛṣṇadēva Rāya* (在位 1509 ~ 29 年) の宮廷で、王の庇護を受けた *Allasāni Peddana*、*Piṅgaḷi Sūranna*、*Tenāli Rāmakṛṣṇa* などの「八詩人」が活躍した時代以後の 2 ~ 3 世紀に作られた。そのため、この頃を「プラバンダの時代」と呼ぶことがある。それらプラバンダ作品の中で特に著名な作品 5 つを「五大叙事詩」(*pa ca kāvya*) と呼ぶが、それは *Kṛṣṇadēva* の教訓的物語 *Āmuktamālyada*、テルグのマーハートムヤの傑作である *Tenāli Rāmakṛṣṇa* の *Pāṇḍuraṅgamāhātmyamu* などである。

⁶ パーラティ (1882.12.11 ~ 1921.9.12) は、*Tirunelvēli* 県 *Ettayapuram* でバラモンの子として生まれる。本名スブラマンヤン。長じて、*Ettayapuram* の宮廷で詩を披露、パーラティ (知識人) の称号を得る。10 歳で作詩したと言う。16 歳 (1898) のときバナーラスへ向かい、インド諸語や英語を学ぶ。1902 年故郷に戻り、1904 年マドラスで日刊紙「スワデーシャ・ミトラン (*Cutēcāmittiraṅ*)」の副編集長となり、インドの政治問題に目を開き、インドの独立、カースト制の廃止、女性の解放を彼の目標として掲げるようになる。1908 年仏領ポンディシェリーに行く。そこでオーロピンド・ゴシュラ友人と『ヴェーダ』などを読み、哲学的な人間愛に満ちた名作『カッコーの歌』(*Kuyil Pāṭṭu*; 1912 年創作、23 年出版) や『クリシュナの歌』(*Kaṅṅaṅ Pāṭṭu*, 1917) を生み出す。1918 年ポンディシェリーを出、1921 年マドラスの寺院で象に打たれ死去。多くの詩集の他に、長・短編小説、タミル語や英語の評論、翻訳作品がある。

て、この事典では、社会・時代背景や文学史の中での位置についてはほとんど触れられていないし、シヴァ・ヴィシュヌ両派の詩人たちや彼らの作品については個々に調べなければならないという点である。したがって、知りたい項目がはっきりしているときは本書に勝る書はないが、そうでないとき、あるいは関連項目も調べたいときには(1)の方がよい。また、本書では、個々の項目のスペースが大きくなることを危惧したのか、略号をやや多用しすぎている感がある。入手は容易である。転写法は[B1]による。

これら(ことに(1)と(3))は他の追隨を許さないが、より簡便にある作者や作品を知りたいのであれば以下の書もよい。

- (4) *International Encyclopaedia of Indian Literature* (ed. by Ganga Ram Garg), Vol. II: *Tamil*, compiled by C. & H. Jesudasan and Shrimati Shantha, Mittal Publications, Delhi, 1987, xvii+204 p.

これには、個々の作品の年代や作者をめぐる諸説の紹介も関連研究の紹介もない。しかし、そのためかえて作品や作者の概略を知りやすい。記述はおおむね正確である。入手は容易である。転写法は基本的には[B2]方式だが、ıやıなどの下線の代りに二重点(..)を使うなど一部変更している。

- (5) Renou, L. et Filliozat, J., *L'Inde Classique: Manuel des études Indiennes*, Paris, 1947/53: Reprint, 1985/1996. (L. ルヌー、J. フィリオザ『インド学大事典』(全3巻), 協力 P. メイル、A.-M. マヌエル、L. シルバーン、山本智教 訳、金花舎、1981/1982/1981.)

本書はやや古いが、それまでのアーリヤ系のみを対象としたインド学の百科事典と異なり、非アーリヤ系、ことにドラヴィダ系をも対象に入れているため、タミルをはじめとしたドラヴィダ系の作品や作者の事項選択および配列に工夫が凝らされ、タミルなど個々の文学史を扱った書よりも広い観点を持つことができる⁷。また、タミル文学史を扱った書では哲学文献の記述があまりないのだが、本書はそれを補っている。ドラヴィダの部分を担当している Pierre Meile⁸の記述はしっかりしていて信頼がおける。ただ、転写法は基本的に[B2]方式なのだが、母音間の c (*Tamil Lexicon* 方式) を s や ś とせずそのまま c と表記したり、二重母音 ai (同前) をつねに ei とするなど、表記にいささか疑問を感じる⁹。このような次第で、日本語版はタミル語のカタカナ表記などに難があるものの、原著にはない充実した索引が巻末につけられ有益である。

⁷たとえば、シヴァ派やヴィシュヌ派を扱う場合、タミル、カンナダ、テルグなどの文学史では、自文化圏の中だけでそれらを記述するが、本書ではまずサンスクリットのそれらについての記述があり、ついでタミルが §910~§920 で、カンナダは §921~§927、テルグが §928~§936 というように述べられ、諸文化間の影響関係も示唆されている。

⁸*Introduction au tamoul* (G. P. Maisonneuve, Paris, 1945, x+224 p.) や *Histoire de l'Inde* (Presses universitaires de France, Paris, 1951, 127 p.) などの著作がある。

⁹たとえば、12品からなるタミル・シヴァ聖典 *Tirumurai* の第9品は[B1]方式(*Tamil Lexicon* 方式)なら *Tiruvicaippā* (tiru-icai-pā「聖なる賛歌」)なのだが、これを *Tiruvicēipp* としている(§906)。基本的に[B2]式転写法であるから、これを日本語版のように「ティルヴィチエイパー」と読むのは自然である。しかし、icai のように母音間の c は s (または ś) であるし、ai も現代タミルでは ei (または ey) となるものの、この読みを ai がどのような位置に来た場合でも、あるいは古い文献にも当てはめることはできないであろう。

この他にも事典としては、現在刊行中である(6)や(7)、またすでに完成した(8)などがある。

- (6) *Encyclopaedia of Tamil Literature* (in 10 vols.), ed. by G. J. Samuel et al., Institute of Asian Studies, Madras.

第3巻まで刊行済 (Vol. 1, 1990; Vol. 2, 1992; Vol. 3, 1996)。転写法は [B1] 研究文献目録がついている項目とそうでない項目がある。記述内容の質は均一ではない。

- (7) *Dravidian Encyclopaedia*, ed. by V. I. Subramoniam, The International School of Dravidian Linguistics, Tiruvananthapuram.

これも第3巻まで刊行済 (Vol. 1, 1990; Vol. 2, 1993; Vol. 3, 1997)。転写法は [B1] 研究文献目録はほとんどついていない。表題が示すようにドラヴィダ関係の百科事典であるから、ある文学作品や作者を簡便に知るために便利な書とはかならずしも言えない。

- (8) *Encyclopaedia of Indian Literature*, 6 vols., Sahitya Akademi, New Delhi, 1987–1994.

表題の示すように、この事典はドラヴィダ諸文学のみを扱っているものではない。記述内容の質は均一ではない。転写法は [A] による。文献目録はほとんどの項目についていない。

3. 文学通史

前節では事典の類をみたが、それらでは文学史の流れはなかなか分からない。そこで、つぎにタミル文学の通史を扱った書を取り上げよう。

タミル文学史に関する書は、他のドラヴィダ諸語(カンナダ、テルグ、マラーヤラム)の文学史に関する書と較べると、質量ともはるかに抜きん出ている¹⁰。

- (9) *The Smile of Murugan: On Tamil Literature of South India*, E. J. Brill, Leiden, 1973, xvi+378 p.

本書は筆者のシカゴ大学での講義をもとに著されたもので¹¹、タミル文学史の主要トピック(年代論、注釈文献、古典文学の再発見など)や、古代から現代の「新しい詩」までの代表的作品(サンガム文学、最古の文法書 *Tolkāppiyam*¹²、タミル

¹⁰カンナダ、テルグ、マラーヤラムの各文学史書については、第5節を参照のこと。

¹¹注4の Zvelebil の略歴参照。

¹²タミル文学史を通じて常に絶大な権威を持ってきた広義の文法書で、「古きカーヴィヤ」の意。作者は Tolkāppiyar (前2世紀～後5世紀?)。3章27節、約1600詩節からなる。第1の「文字(eḷuttu)の章」では音声学、音韻論等を、第2の「語(col)の章」では形態論、意味論、統語法等を、第3の「意味(poru)の章」では詩学、比喩法、修辞学等を扱い、各章は9節からなる。この構成の背景には、文字の連なりが単語をなし、単語の連続が文章をなし文学(詩)となり、それが意味を生む、という伝統的な考え方がある。作者や作品の年代について確かなことは分からない。伝説によると、作者はタミルの学芸の祖とされる聖仙アガスティヤの12弟子の1人で、彼の書は師の書と共に、古都マドゥライにあった宮廷文芸院サンガムで詩作の規範書であった。

文学史上もっとも高名な作品 ^{ティルックラル} *Tirukkural*¹³、ジャイナ教叙事詩 ^{シラッパディハーラム} *Cilappatikāram*¹⁴、シヴァ派バクティ文献、タミル版ラーマヤナの ^{カンバラマヤナム} *Kamparāmāyaṇam*¹⁵ など)を、20章にわたって叙述している。各章はそれぞれのトピックないしは作品に関するモノグラフと言ってもよいが、全体としてのまとまりもよく、文学通史とも呼びうる書である。それまでの文学通史とくらべ、本書の情報量の豊富さ、情報の質の高さ、高い学術性、バランスのとれた批判精神などは、目を見張らせるものがあり、今日でも広く用いられている。巻末には簡単な書評を付した文献目録があるが、1960年代までの重要な文献・論文の多くはそこに収録されており、今日でもなお有益である。

Zvelebilの研究は多岐にわたり¹⁶、しかも先にも述べたように学術性が高く、また関連研究などの情報量も豊富である。したがって、タミル文学について知りたい場合だけでなく研究に際しても、同氏の書あるいは関連する論文をまずはじめに参照し、その情報を手がかりに次の段階に進むのがよいだろう。

¹³ 章133節、1330の2行詩からなる箴言詩集で、単に『クラル』とも呼ばれる(クラルとは文学形式の名称)。作者は Tiruvalluvar で、おそらく5世紀頃のジャイナ教徒。簡潔な表現とヴェンパー(韻律)の軽快なリズムとで広く親しまれ、タミル人が最も高く評価する作品で、国外でも20以上の言語に翻訳されている。作品は同一主題を描く10詩が一節をなし、それらの節が3章を構成する。第1章「法(または義務、道)」は38節からなり、個人の義務、徳目、家庭などを、第2章「財」は70節、王や国家、家臣、友と敵など社会全般を、そして第3章「愛」は25節で男女の愛を扱う。「法」と「財」は、ヒンドゥー教の人生の3大目標のそれに概ね対応するが、「愛」はタミル古典のアラム(恋愛文学)を踏襲したタミル独自のものである。

¹⁴ 『^{かかん}踝環物語』の意。作者は ^{アディハル} *Iṅāṅkōvaṭikaḷ* (5世紀頃?)、単に *Iṅāṅkō* とも言う。チェーラ国王 ^{イランゴ} 子であったが家督を弟に譲り出家、尊者の称号を得たとされる。恐らくジャイナ教徒。作品は3品30章からなり、4千数百行の韻文に多数の歌謡が混じる。書名は物語に重要な役割を果たす主人公の ^{シランフ} 踝環に由来する。物語はチョーラ朝の首府プハールの富裕な出の2人、コーヴァランとカンナギとの幸せな結婚に始まる。しかし夫は高級遊女マーダヴィの虜となり、妻を顧みなくなる。やがてマーダヴィと破局を迎え戻った夫をカンナギは優しく迎え、彼女の踝環を元に再起を期して2人でパーンディア朝の首府マドゥライへ旅立つ。そこで夫は妻の踝環を売ろうとするが、それを盗まれた王妃の踝環と誤解され処刑されてしまう。怒ったカンナギは宮廷で夫の無実を証明し、災いをもたらしたマドゥライを焼き払う。そしてチェーラ国へ向かう途中、天上界から降りてきた夫と再会、2人で天上界へと旅立つ。やがてこのカンナギの奇跡の話は広まり、チェーラ王はヒマラヤに遠征して石を持ちかえり、彼女の石像を作って首府ヴァンジに建立した寺院に安置、祝福する。古代3王朝を舞台とし、歌舞・音楽などの該博な知識を披露しつつ、貞節の女神パッティニ(作中のカンナギ)を詠い挙げるこの作品は、10を越すタミル叙事詩の中でも傑作。なお、コーヴァランとマーダヴィとの間の娘マニメーハライを主人公にした仏教叙事詩 *Maṇimēkalai* と本作品とは、しばしば「双子の叙事詩」と呼ばれる。

¹⁵ 作品の原題は *Irāmāvatāram* (ラーマの降臨)。作者 *Kaṃpaṇ* にちなみこのように通称される。「詩人の皇帝」と呼ばれるこの作者の生涯については、伝説も含め諸説あるがはっきりしない。おそらくタンジョール地方の出。年代についても、9, 10, 12世紀の各説があるが、いずれも決め手に欠ける。作品は、ヴィルッタムという中世の代表的な韻律を80種以上駆使した、1万余(10569~12016詩節の諸版あり)の4~6行詩からなるタミル最長の作品で、タミル文学の最高傑作と評する人もある。物語の大枠や6篇という構成はヴァールミーキの『ラーマヤナ』と共通であるが、単なる翻訳ではなく、ラーマとシーターとの結婚への経緯を初め、随所にサンガム文学の恋愛文学(アラム)の伝統を盛り込み、またバクティ文学の影響も顕著である。ラーマ王物語はタミル地方でも古くから知られるが、タミル版としてはこれが最古の作品である。なお後に、中世の大詩人 *Oṭṭakūttar* が『ラーマヤナ終末篇』を書く。

¹⁶ 研究の中心をなすのは古代から現代にいたるタミル文学であるが、それ以外にも、ドラヴィダ言語学、タミル方言学・神話学・碑文学・民間説話、イルラなどの部族研究、カンナダ、テルグ、マラーヤラム、サンスクリットなどの諸文学に関する研究があり、業績は、単行本で20冊を越え、論文・書評は500篇におよぶ。

しかし、Zvelebilの著作は学問的に公平・客観的である反面、上記の(9)に対するGrosの書評のごとく「教科書」的であるから¹⁷、記述がやや無味乾燥で、個々の作品の味が出てこないきらいがある。それに対し、以下の2つの文学史は、必ずしも客観的記述に徹してはいないが、そのためかえて個々の作品に対する著者の思いが反映されていて味わい深い。

(10) Jesudasan, C. and H., *A History of Tamil Literature*, Y. M. C. A. Publishing House, Calcutta, 1961, xv+305 p.

(11) Meenakashisundaran, T. P., *A History of Tamil Literature*, Annamalai University, Annamalainagar, 1965, xx+211 p.

(10)は、タミル文学史の時代区分にしたがい、各々の時代背景を説き、作品の解題・特徴を述べ、内容の一部を紹介をする。Zvelebilのものと較べると客観性に欠けるものの記述はおおむね妥当である。関連研究の紹介は少ないが、個々の作者やその作品の評価、および作品紹介は魅力的である。タミル文学史の流れを理解するにはおそらく最も優れているし、読み物としても楽しい書である。(11)も多くの点で(10)と共通するが、より主観的である。残念ながら、いずれも現在では入手不可能である。(10)の転写法は[B2]、(11)のそれは[B1]に筆者独自の改良を加えている。

タミル文学全体の通史ではないが、次の書も重要である。

(12) Pillai, S. Vaiyapuri, *History of Tamil Language and Literature: Beginning to 1000 A. D.*, New Century Book House, Madras, 1956, xvi+207 p.

Second revised edition: *Vaiyapuripillai's History of Tamil Language and Literature (From the Beginning to 1000 A.D.)*, New Century Book House, Madras, 1988, xlv+154 p.

1870年代から今世紀初頭にかけてタミル古典(サンガム)文学が「再発見」されたのちタミルナショナリズムが高まり、文学史記述も古典期の年代をより古くする傾向が一般的であった。そのような中で本書は批判的学問態度を貫き、古典期の作品の年代を大幅に引き下げ話題を呼んだ。その学問態度はあまりに批判的との評価もあるが、*Tamil Lexicon*の編者である著者のタミル語学文学に対する造詣は深く¹⁸、作者の提示する年代論の中には再評価すべきものもある。転写法は[C]である。

4. 歴史・言語学・その他

¹⁷参照 F. Gros's review on K. V. Zvelebil's *Smile of Murugan*, *International Journal of Dravidian Linguistics*, Vol. IV, No. 1, 1975, pp. 162–174.

¹⁸Vaiyapuri Pillai (1891–1956)がタミル語学文学にいかに通じていたかは、彼が*Tamil Lexicon*の編者に任命されたのが弱冠35才であったことから分かる。彼は、この仕事に10年携わったあと、マドラス大学のタミル語科主任教授になり研究活動を続けるが、それらの研究で一切*Tamil Lexicon*に言及しなかったのは有名で、いまだに原因は謎である。それについては、P. R. Subramanian, “Prof. S. Vaiyapuri Pillai and the Tamil Lexicon”, *Journal of Tamil Studies*, International Institute of Tamil Studies, Madras, Vol. 41, *Prof. S. Vaiyapuri Pillai Commemoration Volume*, 1992, pp. 24–34 参照。

タミル研究では、哲学、ムスリム文学、キリスト教文学などの分野の研究が遅れている。したがって、これまで取り上げた書でもそれらの扱いは少ない。

南インドの宗教およびそれとの関連で哲学を論じた書としては、南インドの生んだ偉大な歴史学者の手になる下記の書がもっともまとまっている。

- (13) Sastri, K. A. Nilakanta, *Development of Religion in South India*, Orient Longmans, Bombay-Calcutta-Madras-New Delhi, 1963, iv+147 p.
現在では入手は難しい。転写法は [B2] 方式。

歴史に関しては、同じ著者の次の書がもっとも信頼できる。タミル文学に現れる歴史的人物や出来事について知りたい場合、本書によるのがよい。なお、この書でも扱いは小さいものの、南インドの哲学・宗教についてのまとまった記述がある。

- (13) Sastri, K. A. Nilakanta, *A History of South India; from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar* (4th ed.), Oxford University Press, Madras, 1976, 280 p.
入手は容易。転写法は [B2] 方式。

タミルおよびドラヴィダ言語学に関しては、著者自らが教科書として書いたと言う下記の書をはじめに参照するとよいだろう。入手は容易である。

- (14) Zvelebil, K. V., *Dravidian Linguistics: An Introduction*, Pondicherry Institute of Linguistics and Culture, Pondicherry, 1990, xxvi+156 p.

タミル語学文学、ドラヴィダ言語学、その他南インド諸学の最新の研究成果は、欧米の雑誌よりも南インドで発行されている雑誌に載ることが多い。ことに、南インドで発行される雑誌はDTP (*desktop publishing*) で行われるものが増えつつあり、入稿から出版までの期間が短いために欧米の研究者でもそれらの雑誌を研究発表の場とすることが多くなっている。

- (15) *Tamil Culture*, 12 vols., Tuticorin/Madras, 1952–66 (quarterly).
現在マイクロフィッシュの形で入手できる。タミル文学研究がもっとも盛んであった時代の雑誌であり、現在でも見るべき研究はある。

- (16) *Journal of Tamil Studies*, International Institute of Tamil Studies, Madras, Vol. 1 (1969), Vol. 2 (1970); No. 1–, 1972– (bi-annual).
刊行は遅れがちである。なお同研究所では、近年タミル文学研究書の復刻版を出している¹⁹。

- (17) *International Journal of Dravidian Linguistics*, Dravidian Linguistics Association, Thiruvananthapuram (Trivandrum), 1972– (bi-annual).
運営がしっかりしており定期的に刊行される。雑誌名のとおり大部分がドラヴィダ諸言語に関する論文であるが、文学に関わる論考・書評も少なからずある。

¹⁹それらの出版目録は、同研究書のホームページ (<http://intamm.com/nool/iits/Default.htm>) でも見ることができる。

(18) *Journal of the Institute of Asian Studies*, Institute of Asian Studies, Madras, 1984- (bi-annual).

Vol. 3 No. 1 までタイトルは *Journal of Asian Studies* で、Vol. 3 No. 2 から現在のタイトルになっている。定期的に刊行されている。DTP で行われ、入稿から掲載までが速い。

(19) *PILC Journal of Dravidian Studies*, Pondicherry Institute of Linguistics and Culture, Pondicherry, 1991- (bi-annual).

言語学関係のものを中心にさまざまな論文が掲載される。定期的に刊行されている。DTP で行われ、入稿から掲載までが速い。

最後に、まとめとして注意すべき点などについて述べておこう。

- a. タミル文学史で古典文献の年代が古くなっていれば、年代論のみならず作品の分析、古典期の社会・文化記述としても信頼がおけない。たとえば、最古の文典 *Tolkāppiyam* の年代が紀元前 3 世紀より古くしてあるもの、二大叙事詩 (*Cilappatikāram* と *Maṇimēkalai*) や *Tirukkural* の年代が紀元後 2 世紀あるいはそれ以前のものなどである。
- b. 入手に関しては、一般に南インドの本は北インドの本より入手が難しく、また時間もかかる。他方、Asian Educational Services (New Delhi) では、タミルおよび南インドに関する多くの書の復刻版を出しているが、それらの多くは重要でまた良書であり、入手も容易である。
- c. タミル語テキストをわが国あるいは欧米の書店を通じて入手することはまずできず、これまでは現地に赴いて入手する以外なかった。しかし最近では、タミルテキストを扱うインターネット書店も現われ、テキストによっては居ながらにして入手することもできるようになった²⁰。

5. 付録：カンナダ、テルグ、マラヤーラム文学

すでに述べたように、タミル以外のドラヴィダ主要言語のカンナダ、テルグ、マラヤーラムの各文学では文学史書・事典の類は十分とは言えない。

まず、それらの文学の全般にわたるものとしては、すでにあげた (4)、(5)、(7)、(8) があるが、(4) のみ情報を加えておこう。

(4) *International Encyclopaedia of Indian Literature* : Vol. IV, *Kannada*, 1987, xxi-ii+178 p.; Vol. V, *Telugu*, 1988, xvii+194 p.; Vol. VI, *Malayalam*, 1988, xvi+153 p.

個々の文学に関しては、以下のようなものがある。

²⁰タミルテキストを扱っているインターネット書店は現在のところ 1 店のみで、書店名は Tambhi、URL は <http://www.tamilcinema.com/tamilbooks.htm> である。

< カンナダ文学 >

1. Mugali, R. S., *History of Kannada Literature*, Sahitya Akademi, New Delhi, 1975, vi+143 p.
2. Narashimhacharya, R., *History of Kannada Literature (Readership Lectures)*, The Wesley Press and Publishing House, Mysore, 1940, viii+85 p.
3. Rice, Edward P., *A History of Kannada Literature*, Second edition revised and enlarged, Asian Educational Services, New Delhi, 1982 (rep.: 1st ed., 1921), 128 p.+1 map.

< テルグ文学 >

1. Chenchiah, P. & Bahadur, Raja M. Bhujanga, *History of Telugu Literature*, Asian Educational Services, New Delhi, 1988 (rep.), 132 p.
2. Krishnamurthy, Salva, *A History of Telugu Literature*, Institute of Asian Studies, Madras: *Volume I, from early times to 1100 A.D.*, 1994, vi+222 p.; *Volume II, 1108 A.D.-1320 A.D.*, 1996, iv+218 p.
3. Raju, P. T., *Telugu Literature (Andhra Literature)*, (*The P. E. N. Books, The Indian Literatures*, No. XV), The International Book House, Bombay, 1944, xxviii+154 p.
4. Rao, T. Rajagopala, *A Historical Sketch of Telugu Literature*, Asian Educational Services, New Delhi, 1984 (rep.: 1st ed., 1933), iv+162 p.
5. Sitapati, G. V., *History of Telugu Literature*, Sahitya Akademi, New Delhi, 1968, xii+314 p.

< マラヤーラム文学 >

1. Chaitanya, Krishna, *A History of Malayalam Literature*, Orient Longman, New Delhi, 1971, xii+596 p.
2. George, K. M., *A Survey of Malayalam Literature*, Asia Publishing House, New York, 1968, xii+354 p.
3. Menon, T. K. Krishna, *A Primer of Malayalam Literature*, Asian Educational Services, New Delhi, 1990 (rep.: 1st ed., 1939), iv+iii+89+vii p.
4. Nair, P. K. Parameswaran, *History of Malayalam Literature*, translated from the Malayalam by E. M. J. Venniyoor, Sahitya Akademi, New Delhi, 1967, x+296 p.